

清末上海の改良新戯

—その理念と實狀—

平 林 宣 和

はじめに

ここ百年來、中國の傳統演劇はつねに「改」の一文字に命運を左右されてきた。改良、改革、改進など、名稱やその背景は様々だが、社會情勢の推移に伴って、傳統演劇の形式、機能、環境を改めようという言説が間斷なく飛び交い、また實踐されてきたのである。その發端は、亡國への危機感と社會改革の希求を背景に、演劇による民衆の啓蒙を目的としながら、同時に演劇自體の改良をも目指した、清末の戯曲改良運動に求められる。

筆者はかつて、戯曲改良を主張する知識人と傳統演劇、特に京劇の上演の場との連携が始まった初期の状況を、一九〇四年の上海劇界を焦點に検討している^①。それを受けて小論で

は、改良運動最初のピークであるこの年以降、第二の節目となる新舞臺開場^②までの間に、當時「改良新戯」と呼ばれた一連の演目の上演活動がどの程度の展開を示したかを描寫し、改良論の理念が反映されたそれらの演目が、劇界に浸透してゆくプロセスを明らかにしたい。

また同時に、清末上海における上演活動のもっとも一般的な文脈であつた商業的上演^③と、明治期の日本と同様流行語として一人歩きした「改良」ということばの結びつきによる、大衆的流行現象としての改良新戯というトピックについても若干觸れようと思ふ。

資料に關しては、一九〇五年二月七日（光緒三十一年一月四日：以下ことわりがない限り括弧内は舊暦の年月日を示す。年號は光緒である）以降^④、新舞臺開場前夜の一九〇八年一〇月二

五日（三四年一月一日）までの『申報』を軸に、その他同時期に刊行された新聞、雑誌などを適宜参照した。なお、引用文中の傍線と讀點は筆者によるものである。

一 改良新戲の登場

改良新戲の登場とその後の展開を検討する前に、當時それらが期待されていた機能と、その形式的側面、及び範疇に關して若干の確認をしておこう。清末に上演された一連の改良新戲は、民衆の啓蒙という社會的機能をその第一義としていた。形式的側面における改良については、演技様式や舞臺設備に様々な新機軸が採用されているもの、必ずしも體系だった美學的コンセプトが用意されていたわけではない。したがって、内容に啓蒙的な意味あいがありさえすれば、上演の形態がどうあれ、それらの演目は改良新戲という名稱で呼ばれていたのである。これらの演目群は何種類かのタイプに分かれ、新編劇に關しては、おおよそ近代以前の中國の材をとつたものと、國內外の時事に取材したものとに分類される。後者のは往々にして「時裝」、「時事」、「洋裝」といったことばで形容される演目である。こうした新編劇に對し、いわゆる傳統演目のうち啓蒙に益するものありと判断された一

連の演目もまた、改良新戲の範疇に含められている。

さて、一九〇四年以前の段階において、すでに汪笑儂の『党人碑』など啓蒙を目的とした演目が舞臺に登場しており、また『警鐘日報』や『二十世紀大舞臺』をはじめとする新聞、雑誌掲載の論說等が、改良ということばと演劇とを結びつけている。一方で、この時期の巷間には、まだ改良新戲ということばは流布していない。讀者の限られた特殊な刊行物ではなく、一般の目にも容易に觸れうる大新聞の戯目廣告で、「改良新戲」が用いられた始めたのは、いつごろなのであろうか。

當時日毎に戯目廣告を掲載していた『申報』で、最初に改良新戲という名稱が使用されたのは、一九〇五年九月六日（三二年八月八日）、丹桂茶園の夜戲の廣告である。

特煩老供奉 新編排改良新戲 杜十娘怒沈百寶箱

『申報』に戯目廣告の掲載されていない一九〇四年以前は今のところ考證が不可能だが、一九〇五年の二月から九月までの間に、一度も改良新戲ということばが使用されていない點からすると、『申報』紙上に限定した場合、これを改良新戲の初出例と認めてよいと思われる。

また、「改良」ということばのみの使用例としては、春仙

茶園の一九〇五年三月八日（三十二年二月三日）の廣告に、

通班文武名角排新戯 大改良三門街

とあるのが最も早い。さらに演目名として使われた事例としては、同年九月一七日（八月一九日）の天仙茶園、『刑律改良』が初出である。

以上が、改良及び改良新戯ということばが、『申報』の戯目廣告に現れ始めた發端部分である。以下、これを起點に改良新戯という名稱が急速に普及し、各茶園で新作改良新戯が次々に創演されてゆく狀況を見て行こう。

二 丹桂、春仙、天仙と改良新戯

一九〇五年から一九〇八年までの間に上演された改良新戯を検討する前に、當時、改良新戯を積極的に上演していたいくつかの茶園について、丹桂茶園を中心に概観しておく。

後に班底^⑥ごと新舞臺へと移籍する丹桂茶園は、かなり早い時期から改良運動に關わり、また前述のように改良新戯ということばの先例を作った茶園である。もともとは共同租界の寶善街にあり、正式名稱を丹桂勝記茶園といったが、それを夏氏兄弟が引き繼いだ後、一九〇三年に舊城内の九畝地（現在の露香路大境路一帯）に移轉し、丹桂月記茶園と名乗って

いる。^⑧

一九〇五年初頭の丹桂茶園の主力俳優は、夏月珊、夏月潤等夏氏兄弟、および馮子和、七盞燈（毛韻珂）、張順來、小保珊などである。四年後の新舞臺移籍時の主力俳優のうち、この段階で丹桂茶園に参加していなかったのは、潘月樵（小連生）と孫菊仙の二人だが、孫はこの年の二月、光緒三十二年の舊正月に、早くも丹桂茶園に加わっている。潘月樵については當時天仙茶園に所屬しており、丹桂茶園に移籍するのは光緒三十二年の新年、『申報』の廣告上では一九〇六年二月五日（三十二年一月二日）からである。改良運動の立役者の一人である潘月樵の移籍以降、丹桂茶園の改良新戯上演は、より勢い付いていくことになる。

この時期丹桂茶園とともに改良新戯を積極的に上演していたのは、春仙茶園と天仙茶園である。春仙茶園は、上海の戯曲改良運動に先鞭をつけた汪笑儂を擁する茶園で、當時主に北京で戯曲改良運動に従事していた田際雲（想九霄）^⑩も斷續的にだが参加している。一方の天仙茶園は、一九〇五年いっぱいには潘月樵が在籍しており、一九〇六年以降、潘月樵が丹桂に移籍した後も、相當量の改良新戯を上演し續けている。

一九〇五年から翌年前半にかけて、春仙茶園では、『苦旅

行¹²』、『不自由之結婚¹³』、『自强戒烟一良方¹⁴』など、天仙茶園では、『同胞說法¹⁵』、『教學改良¹⁶』などが改良新戯として上演されている。この時期以降、兩茶園は丹桂と同様に繼續して改良新戯を上演してゆくが、春仙茶園は一九〇七年四月七日（三三年三月五日）以降、『申報』紙上から戯目廣告が消滅してしまう。汪笑儂の消息も一時追えなくなるが、この後しばらく間を置いてから春桂茶園の廣告に名前が復活し、改良新戯の上演を再開している。一方の天仙茶園は丹桂の新舞臺移籍後まで一貫して改良新戯を上演し続け、丹桂¹⁷新舞臺の強力なライバルとしての地位を保つてゆくのである。

三つの茶園の中でも、當時知識人の注目を集めていた丹桂と春仙の兩茶園の改良新戯について、『海上梨園雜誌¹⁸』では、

丹桂之新劇與春仙之新劇

丹桂之新劇多動人感情、春仙之新劇多啓人知識・・・春仙之新劇、識者稱之、不識者不知也、丹桂之新劇、識與不識均稱之

と、専ら知識人に賞賛される春仙と、萬人に受け入れられる丹桂との相違を述べている。

また丹桂茶園と春仙茶園の俳優の陣容は、當時の上海の最

高水準と言いうるものであった。『海上梨園雜誌』の「菊榜（科擧の合格者名簿を模して俳優をレベル順に記したもの）」¹⁸には、武榜（武生俳優）の狀元として夏月潤、榜眼として呂月樵、探花として張順來の名が擧がっている。夏月潤と張順來は丹桂の、呂月樵の春仙の所屬である。一方、文榜（老生俳優）の狀元は汪笑儂、榜眼は潘月樵であり、ここから當時の兩茶園の俳優の充實ぶりが窺われるだろう。

これらの茶園は一九〇五年以降、多くの改良新戯を上演し続け、その頻度と影響力とは徐々に増大して行く。以下では、その實際の様子を丹桂茶園を中心に検討してゆこう。

三 丹桂茶園の改良新戯

さて、小論が對象とする一九〇八年までに上演された改良新戯は相當數に上るが、ここでは新舞臺移籍以前に丹桂茶園で初演され、後も長期にわたって上演されてゆく以下の三つの改良新戯を軸に、類似の演目も含めた當時の上演狀況について検討する。

- 一 『潘烈士投海』（一九〇六年）
- 二 『惠興女士』（一九〇七年）
- 三 『黑籍冤魂』（一九〇八年）

『潘烈士投海』は一九〇五年末に實際に起こった事件に取材しており、劇本は事件発生時から翌年初頭にかけて創作されたといわれている。祖國の危機を憂う生員潘伯英が、救國の志をもって日本に留學したものの、清朝政府と結託した文部省が中國人留學生の取締りを強化、革命運動を弾壓したため、海に身を投げて自盡、死をもって國民の奮起を促すという物語で、「清排特別改良強國新戲」という廣告文からもうかがえるように、愛國精神の鼓舞を主題とした演目である。初演は一九〇六年九月一日（三二年七月二三日）で、この日は第一本のみ、第二本は同九月二六日（八月九日）に上演されている。主役の潘伯英は、天仙から移籍してきた潘月樵によって演じられ、以後は彼の當たり役の一つとなった。また、初演後は一九〇六年だけでも五回、毎月一回以上の頻度で再演されている。²¹⁾

『潘烈士投海』の評判については、後に觸れる『黑籍冤魂』初演時の廣告に次のような記載が見られる。

啓者、本園改良時事新劇、頗承各界稱賞、前排潘烈士投海全本、……以此戲有功於世、大加獎賞、并蒙端方伯特賞給獎札一道、以示鼓勵月珊……

というように、『潘烈士投海』を見た當時の兩廣總督端方が

清末上海の改良新戲（平林）

これを稱賛し、夏月珊が特に賞を與えられたとあり、この演目が當時の官界からも一定の評価を得ていたことが窺える。

こうした愛國精神の鼓舞を主題とした演目は複数あり、この時期に丹桂茶園で上演された改良新戲としては、ほかにも『黃勳伯』が挙げられる。黃勳伯は年少の義勇隊副隊長で、一九〇七年五月、素手で強盜を捕らえようとして殉死し、東亞の病夫という評価を覆す英雄として稱揚された實在の人物である。²³⁾ 丹桂茶園はこの事件をすぐさま改良新戲に仕立て上げ、同年六月三日（三三年四月二三日）に初演、その際の廣告文は「黃勳伯義勇無双 中國武士道」であった。當時夏月珊が參與していた『笑林報』に、『黃勳伯』第二本以降の編演の様子が記録されている。

丹桂第二本黃勳伯大出喪、諸君子在場目睹、毋庸鄙人多贅矣。²⁴⁾

丹桂現因刀口黃勳伯凶手王阿仁、已於初三日正法、故接三四本死不放手節後、即行演唱。²⁵⁾

これらの記載は、『申報』の戯目廣告とも一致し、『黃勳伯』が時事に即應して上演されていた過程が見取れる。この『黃勳伯』も、『潘烈士投海』同様に、初演以降も頻繁に上演された改良新戲である。『海上梨園雜誌』では、新舞臺開場

後の記載であるが、

新舞臺黃勳伯一戯、配角勻稱、情節完善、誠新劇佳本也。

というように、なかなかの佳作であると評價している。

このほか、丹桂では一九〇八年一〇月一九日（三四年九月二五日）に「上海真正特別時事改良文明新戯全本中國男兒」といった演目が舞臺にかけられているが、同種の演目は他の茶園でも上演されており、春仙の『立憲鏡』²⁶、『武士魂』²⁷、天仙の『國民同心獨立自強傳』²⁸などが類似の演目であると思われる。

二の『惠興女士』は、もともと北京で初演された演目であり、一九〇六年三月二九日と四月二日、五日（三二年三月五日、九日、一二日）の三日間、田際雲等により打磨廠にある飯庄、福壽堂を會場に、『惠興女士傳』という題名で上演されている。²⁹前年に起こった時事に取材したもので、女學校の設立に向けて盡力した惠興女士が、周囲の執拗な妨害にあり、最後は役所の前で服毒して果てるという、當時の女權問題を主要なテーマとした改良新戯である。北京での上演は當初惠興女士の女學校の經費を募るための演劇助賑であった。丹桂茶園での初演は、北京での上演から十ヶ月ほどのち、一

九〇七年一月一九日（三二年二月六日）であり、當日の廣告文「新排杭州烈女自強新戯 惠興女士 請看纏足苦 再看放足樂」からもその主題がうかがえる。上海における初演時の具體的な状況は、現在のところそれを示す資料がないためはつきりしないが、初演後はやはり頻繁に舞臺にかけられている。

女權問題を扱った演目は、當時ほかにもいくつか上演されていた。その一つが『女子愛國』で、やはり學堂設立を推進した女性を主人公とした演目である。當初は北京で『惠興女士傳』を踵を接するように一九〇六年五月二〇日から二二日（三二年三月二六日、二八日）にかけて上演されている。上海では『惠興女士』より早く、一九〇六年一〇月一五日（三二年八月二八日）、春仙茶園の初演である。

三の『黑籍冤魂』は、一九〇八年六月二三日（三四年五月二五日）に「新排特別警世改良戯」と銘打って初演された戒烟劇（阿片根絶を訴える演目）である。豪商の息子が阿片に溺れ、一家は離散、人力車夫に身をやつした主人公がついには路上で絶命するという物語のこの戒烟劇は、³⁰當時の改良新戯のなかでも最も著名な、ほとんど象徴的な演目といってい

『黑籍冤魂』の初演に先立ち、その二日前の『申報』紙上に「丹桂茶園 本園特別告白 警世改良新戲 黑籍冤魂」という廣告が掲載され、園主の夏月珊自身がこの演目の意圖するところを述べている。

・・・朝廷實行禁烟、寓滬中外官商共表同情贊成斯舉、將租界烟館抽□挨次閉歇、月珊夙且熱心、趁此機會、特排黑籍冤魂一齣、演出吃烟人種種苦境、現身說法歌□皆眞、俾吃烟人見之可以發憤戒徐、力爭人格、於社會上無不裨益、・・・夏月珊謹啓

阿片撲滅運動はすでに十九世紀から始まっており、戒烟劇自体もかなり早い時期から出現していた。當時の丹桂茶園でもこの『黑籍冤魂』のほかに、『和尚捉拿鴉片鬼』など複数の戒烟劇が上演されている。この『和尚捉拿鴉片鬼』については、内容は詳らかにしないが、時期的にはすでに一九〇五年二月一〇日（三一年一月七日）にその上演が確認できる。これらの戒烟劇は、『黑籍冤魂』を中心として、先述の二つのタイプの演目同様その後もたびたび舞臺にかけられていくのである。

さて、以上の三つの演目、及び類似の改良新戲以外に、『申報』に一時期廣告が掲載されただけで、今日その痕跡を

清末上海の改良新戲（平林）

ほとんどとどめていない改良新戲が多数存在した。名稱から啓蒙の意圖があつたと思しき演目で、丹桂の上演によるものとしては、『神道改良』^①、『玉皇團拜改良』^②、『同胞義氣』^③などがある。他の茶園では、たとえば天仙茶園の「新排連臺特別改良應時醒世文明好戲 男有剛強女有烈性」――一九〇七年六月三〇日（三三年五月二〇日）などが、その例として挙げられるだろう。

以上、丹桂茶園を中心に、新舞臺開場以前に上演された改良新戲の主要演目とその展開を見てきた。一九〇五年から一九〇八年までのわずか四年の間に、様々な主題の改良新戲が創作され、それらが繰り返し再演されることによって、改良運動が意圖した演劇による啓蒙という戦略が、ひとまずその理念に沿った形で實現されていった状況が確認できるのである。

四 流行現象としての改良新戲

さて、これまで見てきたように、改良運動の理念を體現した改良新戲は、清末上海の劇界に急速に浸透していったわけだが、一方で、「改良」ということは當時巷間に流布していた最新の流行語でもあった。同様の意味で用いられていた

「文明」ということばとともに、徐半梅は次のように回顧している。

當時の新しい事物一切には、往々にして「文明」あるいは「改良」ということばが冠せられた。例えばステッキは文明棍、女性の御下げ髪は文明頭と呼ばれていた。こうした例は枚擧に暇がないが、特に蘇州上海近辺で盛んだった宣卷は、もともと周囲の人間が念佛して主唱者に唱和するものだが、辛亥（筆者注：一九一一年）のころ、自ら念佛を廢し管弦樂器でそれに代えた後は、文明宣卷と改稱した。³⁴

このように、改良あるいは文明ということばは、そのまま目新しさの代名詞であったわけだが、演劇もまた例外ではなく、啓蒙という企圖を持たないにもかかわらず、物珍しきゆえに改良新戯と名付けられた演目が大量に生まれている。現在までに著された演劇史は、この種の改良新戯にあまり觸れることがなかったが、實際のところそれらはかなりの數に登る。

以下、いくつか具體例を挙げよう。一九〇八年三月一四日（三四年二月一二日）の天仙茶園の夜戯廣告に、

新排連臺改良新戯 大馬路看電氣車

とある。この演目は當時共同租界のメインストリート南京路に初めて路面電車が開通した際に上演されたものだが、その路面電車の物珍しさを賣り物にするだけで、啓蒙の意味合いはほとんど含まれていないと考えられる。また同じ天仙茶園で一九〇七年七月八日（三三年五月二八日）に上演された「新排連臺上海時事新戯 全部萬國賽珍會」は、博覽會の模様を再現したと思しき演目だが、これについて『笑林報』の「粉墨叢談」に次のようなコメントがある。³⁵

前晚天仙創演萬國賽珍會新戯、内外巧禁各種燈彩頗極精緻、情節周到、議論正大、諸名角所扮各紳董及各紳宦眷屬與女學堂女學生、售賣名珍物、靡不惟妙惟肖、伶界改良之速、可喜可賀

と、物語やその中の議論に意義を見出しつつ、劇中に登場する精巧な燈彩や珍しい物産などもまとめて「改良」と表現している。こうしたところから當時の改良ということばのニュアンスがうかがえるだろう。

また、これら新作物と同時に、傳統演目に改編を加えたと思しき

重排眞正時事改良新戯 目連救母³⁶

のような演目も、改良新戯と銘打って上演されている。これ

ら二種類の演目群は、實際のところ、改良運動の勃興以前、十九世紀後半に出現した各種の「新戯」の流れを繼承するもので、それらが新たに改良新戯という名稱を與えられたにすぎないと考えられる。『海上梨園雜誌』では、

滬上各戲園所登戲目、必加改良二字、然所演者仍屬舊様、試問改在何處、良在何處……

と、名前ばかりが改良で、その實は舊態依然としたものであると述べている。このように當時改良新戯と名付けられたものの中には、改良運動が揚げた理念とはかけはなれた演目も一定量存在したのである。

さらに改良新戯とも呼ばれず、また啓蒙的内容も持たないと思われる時事物もかなりの數上演されている。捕り物を扱ったと思われる「重排北京新聞新戯 前本捉掌康八」³⁷、探偵物と思しき「新排新奇新戯 頭本新戯 偵探案 火裏罪人 洋裝服色」³⁸など、この種の演目は枚擧に暇がない。さらに春仙茶園で上演された「新排機器轉電新戯 放氣球倒掛奇人」³⁹、「請看應時新戯 大跳浜得頭嫖」⁴⁰なども、具體的な内容にはつきりしないが、同様に當時のゴシップをそのまま芝居に仕立てたものと思われる。こうした時事新戯、特に探偵物の系脈は、民國期に改良運動が終息した後の上海京劇の特

質の一つとなる。

こうした時事新戯のほかに、十九世紀以來の燈彩劇もやはり頻繁に舞臺にかけられており、一九〇五年の舊曆正月明けの戲目廣告に目を通せば、その様子は明らかに讀みとれる。もともと燈彩戲は節日に特に多く演じられるが、この年の舊正月も例外ではない。天仙茶園では、

善遊斗牛宮 洛陽橋 鯉魚跳龍門 割肉還父 刮肉還母
廣寒宮 富貴神仙 以上燈戲共成七本、本園特請名師日
夜排演……

とあり計七本が、玉仙茶園では「共有二十四本燈戲 興唐圖 醉打御花園」⁴¹が、汪笑儂のいる春仙茶園でも、「新排時式異様燈彩玲瓏變化羅漢堆山五色電光燈戲 大香山 白雀寺 遊十殿」が上演されている。さらに丹桂茶園では、二月だけでも「斗牛宮」が七回、「洛陽橋」が四回上演されている。また、十九世紀以來の『夢游上海』⁴³、『遊張園』⁴⁴など、單に上海の風景を舞臺上に再現しただけの演目も、この時期引き續き舞臺にかけられている。徐々に上演回數が減ってはいるものの、最終的には新舞臺開場後もこれらの燈彩戲は生き残ってゆくのである。

改良運動の理念を體現した改良新戯は、當時の社會情勢を

背景に、國情に關心を持つ多くの人々の注目を集めた。しかし他方、もう一つの改良新戯及びそれに準ずる時式新戯、燈彩戯も、目新しさを賣り物に多くの観客を集めていた。後者を支えていたのは、政治的な先鋭さとはあまり縁のない一般大衆層と考えられ、劇場の側でも商業的な需要から、こうした観客層を相手に一定量の演目を舞臺にかけていたわけである。さらにこれらの演目も、實際には一日の番組の中の一つか、多くても二つ程度を占めるのみで、それ以外はいわゆる老戯、傳統演目が厚い層を爲してひかえている。この時期の上海の改良新戯に關する従來の研究は、政治的、あるいは藝術的に先鋭化した部分に注目してきたが、今後はそれ以外の部分を支える都市の大衆文化の諸相に對しても、並行して考察が行われてゆく必要があると思われる。

小論では、改良新戯ということばが登場した後の代表的改良新戯の上演狀況を検討し、それらが時とともに一つの潮流となつていく様子を概観した。従來改良運動というと新舞臺開場後に對する言及が多かつたが、それ以前に相當の盛り上がりを見せていたことが明らかになつたと思われる。この流れは、以後新舞臺を軸とする上演活動へと受け繼がれ、つい

には辛亥革命という極點へと登り詰めて行く。そしてまた一方、そうした動きとは距離を置いたところで、一般の観客の需要に應えた通俗的な改良新戯およびそれに準ずる演目が、一定量存在することを指摘した。今後は一つの時代の劇界の狀況全體を構成する、ひと連なりの文化の層として、それに検討が加えられるべきであらう。

注

(1) 拙稿「一九〇四年の上海劇界——「警鐘日報」と戯曲改良運動萌芽期の上海狀況」、早稻田大學坪内博士記念演劇博物館「演劇研究」第一八號、一九九五年。上海の改良運動に關するより全般的な狀況については、高義龍「近代戲劇在上海の發軔與勃興」(陳伯海・袁進主編「上海近代文學史」第四章、上海人民出版社、一九九三年)、および北京市藝術研究所編著「中國京劇史(上卷)」(中國戲劇出版社、一九九〇年)に詳しい。

(2) 拙稿「茶園から舞臺へ——新舞臺開場と中國演劇の近代——」(早稻田大學坪内博士記念演劇博物館「演劇研究」第一九號、一九九六年三月)を參照。

(3) 當時の商業劇場たる茶園における上演のほか、上海の各劇團は時に堂會、廟會における上演の招請にも應じていた

はずである。しかし、資料の不足から現時点でそれらの活動を詳細に跡付けることは難しい。上海の會館における上演活動については、田仲一成「清代の會館演劇について」〔『東洋文化研究所紀要』第八十六號、一九八一年〕に民國期の狀況に關して、また大野美穂子「上海における戲園の形成と發展」〔『お茶の水史學』二六・二七號、一九八三年〕に光緒初年の狀況について、それぞれ言及がある。ただ、全體としては儀禮と捉えられる堂會や廟會も、劇團側からすればやはり一定の代金を得て行かう上演活動の一環であり、彼らにとつては巡業に準ずる商業的上演の一部と考える方が適當である。

(4) この日以前の『申報』紙上では、戯目廣告の掲載が一時ストップしている。當該時期の『申報』の戯目廣告掲載狀況については、前掲「一九〇四年の上海劇界」を参照のこと。

(5) 當時の改良新戲の多くは京劇によつて上演されているが、一方で當事者の頭の中には、京劇を劇種單位で改良しようという意圖はなかったであろうと思われる(無論、劇種という概念も當時の人々は持ちあわせていない)。演劇が啓蒙のためのメディアとして機能していれば、このような形式的側面に關する検討は必ずしも重要な問題にはならなかったと思われる。

清末上海の改良新戲(平林)

(6) 茶園と長期契約を結び、長年その茶園に出演している俳優をまとめて班底と呼ぶ。下回りの役者達をさす場合が多い。反對に一時期招聘されて出演する俳優を名角と呼ぶ。

(7) 前掲「一九〇四年の上海劇界」『警鐘日報』と戯曲改良運動萌芽期の上演狀況」

(8) 前掲『上海近代文學史』、四四九―四五〇頁。ただし典據は不明。

(9) 『申報』一九〇五年二月七日(三一年一月八日)に「孫菊仙告白」廣告が掲載されている。そこには、「庚子の年(一九〇〇年)に上海に来て以來、早く北京に戻り宮廷に出仕したいと考えていたが、いかんせん年老い病多く、今日まで果たせないうでいた。今度こそ返ろうと考えていた矢先、古くからの友人にせがまれ、丹桂茶園で數日間芝居を演じることになった」との記載がある。同じ日の別の廣告にも、「丹桂茶園 特請真正内 延供奉超等名角 孫菊仙 特煩好友轉託情留 在小園串演數日」とある。しかし數日の予定の客演の後、結局は丹桂に留まり、後には新舞臺の開場に参加、翌年にはさらに新劇場の開場にまで参畫している。

孫菊仙はもともと内延供奉(選出されて宮廷内に出仕し、宮中での上演に参加すること)の俳優であったが、十

九世紀末には一時期上海に滞在し、後の一九〇〇年に再び上海を訪れ、潘月樵と天仙茶園を開場、さらに李春來と春仙茶園を開いたとされる（前掲『中國京劇史（上卷）』四二五頁）。

(10) 『中國京劇史（上卷）』四四七頁に、「三十年（一九〇四年）、潘月樵は天仙茶園を離れ、夏氏兄弟の招聘に應じ、丹桂茶園に移籍した」とあるのは、廣告からわかるように誤りである。また、『上海近代文學史』、四四八頁についても同様である。

(11) 田際雲と改良運動に關しては、吉川良和「晚清北京の戯曲改革と秦腔」（東京都立大學『人文學報』一一二號、一九七六年一月）を參照。田際雲は一九世紀末に上海に滞在し、多くの時式新戲、燈彩戲を創作、上演した。

(12) 『申報』一九〇五年一〇月八日（三一年九月一〇月）。「瓜種蘭因」と同様、國外の戰爭に取材したものとされるこの演目は、一九〇四年にすでに上演されていたとされる。

(13) 『申報』一九〇五年一月二三日（三一年一〇月二七日）。

(14) 『申報』一九〇六年三月一二日（三二年二月一八日）。題名から後に觸れる戒烟劇と思われる。

(15) 『申報』一九〇五年二月一三日（三一年一月一七

日）。別稱を『同胞演說』という。

(16) 『申報』一九〇六年一月一五日（三二年二月二二日）。

(17) 慕優生編、振贖社、宣統三年（一九一一年）四月。いわゆる雜誌ではなく單行本で、全十二巻に分かれ、清末上海の劇界の諸側面を詳述している。

(18) この菊榜は、海上漱石生の章回小説『海上繁華夢』（上海灘與上海人叢書（第二輯）一九九一年五月、所收）第二十八回によると、一九〇〇年および翌年に『消閑報』に發表されたものらしい。祝均宙・馬莉「近現代戲曲報紙與副刊總目提要」（『上海戲曲史料薈萃』第五輯、一九八八年九月）にも同様の記載がある。

(19) 無論當時の上海にはこれ以外の茶園も多數存在しており、改良運動とはそれぞれに距離を保ちつつ、上演を續けていた。

(20) 『上海近代文學史』、四五三～四五四頁の記載による。「中國近代文學大系戲劇集一」（上海書店、一九九六年）も同様。劇本は後の一九一〇年に、上海改良戲曲社から白雲詞人の作として出版されている。ただし初演時の作者が白雲詞人かどうかは判然としない。馬明捷「梅蘭芳與近代京劇改良」（『戲曲藝術』、一九九三年二期）では、北京の票友の撰とある。

(21) 一〇月六日（八月一九日）、一〇月二〇日（九月三日）、

- 一月四日(九月一八日)、一月二六日(一〇月一日)、一月二八日(一月一三日)。
- (22) 『申報』一九〇八年六月二日(三四年五月二三日)。
- (23) 一九〇七年五月四日(三三年三月二二日)の『申報』に掲載された報道には、「外人之輕我日益甚、不曰病夫邦、即曰老大國、今得黃君以死爲倡、旅滬西人之聞此事者、必且瞠目相視、以爲得未曾有、從今以後不敢謂中國無人」とある。
- (24) 『笑林報』一九〇七年六月二三日(三三年五月三日)。
- (25) 『笑林報』一九〇七年六月一五日(三三年五月五日)。
- (26) 『申報』一九〇六年一〇月八日(三二年八月二二日)。廣告文には「新排改良頭本新戲」とある。汪笑儂編劇、主演、この日から一四日(二七日)まで、九本が上演されている。
- (27) 『申報』一九〇六年十二月二二日(三二年十一月六日)。廣告文には「新排社會改良第一編文武新戲」とある。
- (28) 廣告掲載は一九〇七年一月二二日(三三年一〇月七日)。但し初演は一九〇八年三月二二日(三四年二月一日)。廣告文には「喚醒同胞自強之心」とあり、その主旨が窺われる。
- (29) 前掲吉川論文による。
- (30) 清潭生「清國俳優夏月潤と語る」(『演藝畫報』、明治四二年(一九〇九年)、一三號)に詳細な解説がある。また前掲『中國近代文學大系・戲劇集一』に、「夏月珊編 鄭正秋録」により一九一一年に刊行された梗概が収録されている。原作は、『月月小説』第壹年第四號に掲載された吳趸人の短編小説『黑籍冤魂』と思われるが、上演に到るまでの詳細は不明。
- (31) 『申報』一九〇五年一〇月一三日(三二年九月一五日)。
- (32) 『申報』一九〇六年三月一五日(三二年二月三日)。
- (33) 『申報』一九〇六年九月三〇日(三二年八月一三日)。
- (34) 徐半梅『話劇創始期回憶録』、中國戲劇出版社、一九五七年、一二五頁。
- (35) 『申報』一九〇七年七月一〇日(三三年六月一日)。
- (36) 『申報』一九〇八年六月七日(三四年五月九日)、丹桂茶園。
- (37) 『申報』一九〇五年七月七日(三二年六月四日) 丹桂茶園。
- (38) 『申報』一九〇六年十二月三一日(三二年十一月一日)、春仙茶園。
- (39) 『申報』一九〇六年五月二五日(三二年閏四月三日)。
- (40) 『申報』一九〇六年五月一五日(三三年四月二日)。
- (41) 以上天仙、玉仙茶園の廣告は、一九〇五年二月九日(三一年一月六日)のもの。

(42) 『申報』一九〇五年二月五日(三二年一月二二日)。

(43) 一九〇六年三月二日(三二年二月八日)以降、しばらくの間は、春仙茶園でたびたび上演されている。

(44) 一九〇五年四月二日(三二年二月二八日)、丹桂茶園。

※ 本研究は、一九九五年度早稲田大學特定課題研究助成費による研究成果の一部である。